

「探究の対話(p4c)」って、何？

10年前から実践されている宮城県で、学ばせていただきました！

中野市立高社中学校 太田 智明

1 「探究の対話(p4c)」との出会い

3年前(令和2年)の5月、学校が休校で自宅勤務となる。



NHKのEテレで、宮城県気仙沼市の小学校6年生が成長していく姿を追ったドキュメンタリー「7人の小さき探究者～変わりゆく世界の真ん中で～」を、偶然に視聴。「探究の対話(p4c)」って何だろう？初めて聞くけど…。



宮城教育大学上廣倫理教育アカデミーの存在を知る。

2 「探究の対話(p4c)」とは？

p4cは「philosophy for children」の略で、直訳すると「子どものための哲学」ということになるが、1970年代にアメリカで始まり、世界各地で実践されている。

宮城県では震災復興のボランティアとして仙台においてになったハワイ大学のジャクソン博士によって紹介された「p4cハワイ」が元になっている。

日本の公教育の中には「哲学」という領域はないので、直訳せずに「探究の対話(p4c)」としたそうです。

「探究の対話(p4c)」が大切にしていること

「誰もが安心して対話に加わることができるセーフティ(安心感)の理念」

「哲学的な深まりをめざすのではなく、すべての子どもたちがコミュニティの中に居場所を見つけること」

「対話を通じて、新たな見方や考え方を探究していくこと」

～震災で傷ついた宮城の子どもたちの心の復興を！～



共生・共創の学びの実現・未来社会を支える市民の育成・Well-Beingへ

～子どもたち自身が現実社会を理解し、自ら考え未知の変化にも対応できる人間として成長していく～

セーフティを確保するための「4つの約束」

- ① コミュニティボール(CB)を持った人だけが話せる。(他の人は最後まで耳を傾ける)
- ② 意見を聴いてみたい人やまだ話していない人にCBをまわす。(できるだけ全員が話す機会をつくる)
- ③ 考えが浮かばないときや話したくないときは、(話の途中でも)何度でもパスができる。
- ④ 相手を傷つけるようなことは言わない。(バカにしたり、冷やかしたり、からかったりしない)

3 初めて「探究の対話(p4c)」をした生徒の感想

「探究の対話(p4c)」は道徳との親和性が高いとされているが、他教科でも実践可能ということで、職場体験学習に向けて「働くことの意味や価値に対する理解を深め、よりよい職場体験学習にしようとする意欲と態度を育む」ことをねらって、特別活動の中で初めて実践を試みた。

○いつもはあまりしゃべらない人も、ボールがまわってきたらよく答えてくれて、そういう人の考えていることがわかってよかった。(A生)

○自分の意見と真逆のことを言う人もいた。逆の人の意見を聞くと、自分も納得した。(T生)

○自分の考えが途中で変わりました。いろいろな人の考えを聞いて「あ～、確かに」などと思ったことがたくさんあったので、自分の考えが変わりました。あと、自分と同じ考えの人がたくさんいて、共感できました。(Y生)

○やっぱりみんなの思っていることはそれぞれ違って、人の意見を聞けば聞くほど自分の意見も変わっていった、最終的にはその違う意見のことも考えて、他の意見のことも考えられるようになり、とても考えが深まったなと感じました。(M生)

○今日はあてられるんじゃないかと、自分で手を挙げて発言

したことは努力したんじゃないけど、自分に自信がついた気がした。(H生)

→このH生(当時2年生)は、私の授業で自分から挙手して発言したのは、中学入学以来初めてだったので驚きました。セーフティを感じたからでしょうか。

4 「主体的・対話的で深い学び」の実現へ

① 子どもの「問い」から始まる～主体的な学びへ～

「問うのは教師、答えるのは子ども」からの脱却
育てたいのは「正解する力」？「問う力」はどう育てる？
教師の問いを待つのでなく、自ら問いを考える子ども
なぜ？本当そうなの？という「探究心(自ら考える力)」を

② 一人で考えるよりも、みんなで考える～対話的な学びへ～

一人の考えには限界ある。みんなで考えると良い知恵が浮かぶ。他者の考えを聴くことで、自分の考えが深まる。
結論を出すためではなく、自分の考えを広げ、深めるために「話し合う→語り合う→聴き合う」協働的な関係へ

③ 正解のないことを考える大切さ～深い学びへ～

予測不能な、変化の激しい社会をたくましく生きぬく力を。
正解はひとつではない。大人(教師)も正解がわからない。
子どもとともに考え、学ぶ教師。子どもから学ぶ教師。
授業の時間が終わっても学び続ける。考え続ける。

